

創立 30 周年特集

資料

各地の品質工学研究会の取り組み

●北海道タグチメソッド研究会の紹介
—品質工学会創立 30 周年に寄せて—

手島昌一 アングルトライ(株)

私事から書き始めて恐縮なのだが、北海道タグチメソッド研究会が出来た流れは、学会創立のほぼ1年前にあったと考えている。矢野宏先生が1992年11月に、日本規格協会札幌支部の招へいで講演をされ、私は講演後に控室の先生をお訪ねした。先生は北海道で品質工学に触れたことのある人は居ないと考えていたようで、私が東京の会社で勉強していたことをお話すると、大変喜んでおられた。ただし後日談だが、研究会のメンバーになった札幌在住の医師が、数十年前に田口先生から直接指導を仰いだことがあるとのことだったので、道内では私よりずっと前に品質工学に触れた方が居たのである。

北海道研究会誕生への本格的な動きは、1993年の品質工学フォーラム設立の翌年のことである。矢野先生が企業指導で北海道入りをされるタイミングで、何度か無料研修会を開いてくださった。そして、1995年のフォーラム大会で各地域の交歓会があり、そのとき出来事があった。発言の機会をいただいた私が、簡単に北海道の状況を報告し、ゆくゆくは地方研究会にしたいという趣旨の話をした。すると部屋の後ろに居られた矢野先生から「北海道で今年中に作ると言ってしまったほうがいいよ、言いなさいよ」と絶妙のタイミングで合いの手が入ったのである。言う方も言われる方も、エネルギーに溢れていた。

当時、北海道大学工学部の大内東教授にも興味を持っていただいていたので、主査(会長)となつていただき、研究会がスタートした。北大のほか、(株)ダイナックスや北海道立工業試験場などもメン

バーとなり、2001年には千歳市にあるダイナックス本社講堂で企業交流会が開催された。このときの参加者の中にはリュック姿で来道し、帰りの小旅行を楽しんだ方々もいた。田口玄一先生も函館経由で東京に戻っていかれた。

北海道には本州と比べてものづくり企業が少ない。農畜産業、漁業などの一次産業が主流であり品質工学が適用できる場が少なかった。ものづくり企業に紹介しても「うちはそんな難しいことやる前の段階」と言われることが多かった。その状況の中でどうやって品質工学を知ってもらい、使ってもらえるのか研究会メンバーで議論もした。実りの一つ二つを挙げると、胡蝶蘭育成の不良率低減と医学分野へのMTシステムの適用などがある。

赤平市に赤平オーキッド(株)という胡蝶蘭を栽培する会社があり、品質工学適用を実施した。大きなビニールハウス6棟で胡蝶蘭を栽培しているが、白い花びらに黒い斑点が発生することがあり、そうになると出荷できないので改善したいとの課題が持ち込まれた。温度、湿度、二酸化炭素などの時系列計測データを見て「いつもと違うパターンはないか」というMT法の視点で検討し、ついに解決に至った。胡蝶蘭は南国の花だが、温度管理が重要であり、夏は自然の空気、冬は地熱による暖房を利用することで北海道も栽培に適した地とのことである。

また、ある大学病院から「深層学習などのAIでは十分な情報が得られないので、MT法が利用できないか」との相談も寄せられている。田口博士がよく説いておられた「健康人は均質(ホモジニアス)」という原則に沿った考えが重要、などの議論を重ねている。MTシステムの黎明期では医療問題に多く適用された経緯もあり、鋭意取り組んでいるところ